

生成言語理論(後期集中講義)

2018年2月13日 10:30~12:00 @210 講義室

講師: 菅原 彩加 (三重大学人文学部)

ayakasug@human.mie-u.ac.jp

タイトル: Only を伴う文における質問・回答の整合性が言語獲得および文処理に及ぼす影響

要旨:

Crain et al. (1994) 以降、第一言語獲得における Only を伴う文の理解について様々な研究がなされてきた。特に、(1a)のような主語に焦点を置く文(主語 only 文と呼ぶ)の理解が比較的遅く(代わりに(1b)のように解釈してしまう)、それに対して(1b)のように目的語に焦点が置かれ、動詞句に only が現れる文(動詞句 only 文と呼ぶ)は早期から正しく理解できるという傾向にあるという理解度の不均衡が、複数の言語における広い年齢層で観察されてきている(Philip & Lynch 2000, Notley et al. 2009 for English; Yang 2002, Notley et al. 2009, Zhou & Crain 2010 for Mandarin; Müller et al. 2011 for German; Endo 2004, Sano 2011 for Japanese)。

(1) a. Only the cat is holding a flag.

b. The cat is only holding a flag.

この要因について、Crain et al. など多くの先行研究では、幼児には主語 only 文についての正しい文法知識が欠けているのではないかと提案がなされてきた。しかし本研究では、これまでの実験デザインにおいて質問・回答整合性(Question-Answer Congruence, Rooth 1992)が満たされていなかったことが、only 文に対する理解度を幼児が十分に発揮できていなかった理由の一つなのではないかと提案する。本研究の実験では質問・回答整合性を満たしたデザインを用いて(1a)の理解度を測り、正答率が70%以上となった例を報告する(先行文献を模したデザインでは30%)。

また、文法知識の有無が子どもの理解度に影響を及ぼしていたのであれば、大人の話者は(1a)も(1b)も理解度や文処理に差は出ないはずである。しかし、今回提案するように、質問・回答整合性の充足率が文処理の負荷にかかわっているのであれば、大人の話者においても質問・回答整合性の充足率に合わせて理解度や文処理に差が生まれるのではないかと予測される。本研究では、大人の英語話者に対して行った実験を報告し、質問・回答整合性が文処理に及ぼす影響を考察する。

Selected references.

Crain, Stephen, Weijia Ni, and Laura Conway. 1994. Learning, parsing, and modularity. In *Perspectives on sentence processing*, eds. Charles Clifton, Jr., Lyn Frazier, and Keith Rayner, 443-467. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.

Rooth, Mats. 1992. A theory of focus interpretation. *Natural Language Semantics*, 75-116.